

ブラームス：ピアノ協奏曲第1番二短調 Op.15

作曲家が曲を構想するとき、曲の形態はどの段階で決定されるのだろうか。スケッチ帳などにみられる初期の構想には、たいてい五線譜にメロディや和音の断片などが書かれているが、ピアノ曲なのか、交響曲なのかといった形態や楽器名などは記されていないことが多い。すでに作曲家の頭の中にあるのか否か知ることは難しいが、いずれにしても、構想を温めていくうちに次第に音のイメージが絞られていくのが一般的であろう。

だが、ヨハネス・ブラームス（1833-1897）の《ピアノ協奏曲第1番》の場合は、構想から完成までがストレートには進まなかった。最初の形態から二転三転した末に、ようやくピアノ協奏曲という形に落ち着いた作品なのである。

最初の形は、1854年に完成された《2台ピアノのためのソナタ》である。3楽章構成で、調性も同じ二短調だった。当時ブラームスはロベルト・シューマン（1810-1856）とその妻クララ（1819-1896）との親交が始まっており、クララとともにこのソナタをよく演奏したらしい。しかし、ブラームスは完成後も2台ピアノという形態に満足できなかった。「このソナタを長く寝かせておきたい」と語るブラームスの構想は、より大きな編成へと向かっていた。それは最初、交響曲へと向けられ、ブラームスはこのソナタに基づいて第1楽章のオーケストレーションまでおこなった。しかし、この構想は続かなかった。

2台ピアノでも交響曲でも満足できなかったブラームスが最終的にたどりついたのが、ピアノ協奏曲だった。独奏ピアノがオーケストラと一体になって作り上げるこの形態こそ、ブラームスが心に描く音楽を完璧に表現する器となったのである。

こうしてピアノ協奏曲として再考されたこの作品が完成したのは、2台ピアノのソナタから足かけ5年後の1859年であった。まだオーケストラの扱いに十分慣れていなかったブラームスは、ヴァイオリニストで生涯の友となるヨーゼフ・ヨアヒム（1831-1907）やクララから助言を得ながら曲を書き進めた。とくにヨアヒムはメンデルスゾーンやリストのもとで研鑽を積み、指揮者としても活動していたことから、ブラームスは彼に楽器の用法や演奏効果などについて細かな相談をしている。作曲の途上では、シューマンがライン河に身を投げ、療養中に他界するという衝撃的なできごともあった。公的な初演は1859年1月、北ドイツのハノーファーで、ブラームス自身のピアノ独奏、ヨアヒムの指揮でおこなわれた。最終的な形がピアノ協奏曲であったとはいえ、ブラームスの壮大な構想はその枠さえ超えている。たとえば、二短調の主音レが、ホルン4、ティンパニ、ヴィオラ、コントラバスによって強音で鳴り響く曲の開始部分をとってみても、これほど大胆不敵で挑戦的な始まり方は、協奏曲というよりも交響曲の発想に近いものがある。第1楽章が484小節という長さを持ちながら、その中にピアノのカデンツァが一切無いのも型破りといえる。もちろんピアニストには高度な技巧が要求されるが、この曲でピアノ・パートに求められているのは、協奏曲の醍醐味ともいえる華麗な効果ではなく、むしろオーケストラの表や裏になりながら、常に一体となって音楽を構築していく力なのである。ブラームスの野心がこの協奏曲全体にみなぎっている。

第1楽章：マエストーソ 二短調：主音である「二音」の上で、ヴァイオリンとチェロが威厳にみちた第1主題を奏する。変ホ長調の第2主題が現れるのは、ピアノの入りの後である。**第2楽章：アダージョ 二長調**：宗教的な感情との結びつきが指摘される緩徐楽章。**第3楽章：ロンド、アレグロ・ノン・トロツポ 二短調**：勇壮で活気に満ち、長短2つのカデンツァを含む。

遠山菜穂美

※掲載された曲目解説の無断転載、転写、複写を禁じます。